

## スタジオコースの作品から

Selected Students' Works from Studio Course 2011

学部の4年生は毎年「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組むことになる。それぞれの担当教官が独自のテーマを設定し、学生はそのテーマに応じて、自らの望むコースを所属する研究室に関係なく自由に選択するといった、いわば卒業設計の前哨戦だ。その様々な作品の中から、4コース8名の作品をここに紹介する。

In the 4th grade, undergraduate students take the design class called 'studio course'.

Each professor sets up his original subject, and students select freely regardless of their laboratory.

These studios, so called, are 'the preliminary skirmish' of diploma projects.

We will introduce 8 works among the various courses.

竹山研究室

TAKEYAMA STUDIO

" 書物と遊歩 "

Chisato EKAWA

Takako KONISHI

Yasuharu TAMAI

読むという行為は「意識としての人間」に関わるが、建築空間として図書館は「身体としての人間」に関わる。

電子書籍の普及で図書館はどう変わるか。

書物の変容 / あらためてモノであることの良さ、特質を考える

身体 / 移動することとたたくこと

知的活動と書物 / 読むことと考えること あるいは、書くこと

知的活動と遊歩 / カントや西田幾多郎は歩きながら考えた 頭脳の動きが活発になる  
身体運動と脳の活性化 目に入る風景の変化が脳を刺激する

書物と遊歩 / 持ち運びやすい 起動する必要がある 電源もいらぬ

遊歩と建築 / 建築的プロムナード

コンピューターの時代。

電子書籍のメリット / 検索可能性 物理的スペースに関わりなく収蔵、収集

ヴィジュアル・イメージと書物 / 映像

生身の人間は身体を持ち、電子ミストに還元し得ない。

人間の介在する建築空間としての図書館（ビブリオテーク） / メディアテーク

高松研究室

TAKAMATSU STUDIO

" 生きるための建築 "

Hiroko NATSUME

Keisuke MIZUTANI

Syohei MIYAMOTO

生きるための建築を構想せよ。

門内研究室

MON-NAI STUDIO

" 都市と建築 "

Kosuke YOSHIOKA

21世紀を迎えて、大量生産・大量消費を基調としたデザインが行き詰まり、環境や社会の制約条件などを考慮して、幅広い要求を質的に満足するデザインへの転換が求められている。そこでは、デザインを「人間と環境との関係に変化をもたらす」営みとして理解し、個々の人工物のデザインにとどまらず、人工物相互の関係や人工物と環境・人間との関係に配慮することにより、豊かな環境・社会システムをデザインすることが求められている。

都市の中の建築は、他の人工物や人間・環境とのネットワークを形成する結節点として存在する。このスタジオでは、「都市と建築」のダイナミックな関係に焦点を結び、歴史都市・京都（他の都市を選んでもよい）から適当な場所を選定し、①ミクロな建築レベルの環境のデザインを通して、②マクロな都市レベルの環境をデザインする可能性を探求する。具体的には、都市空間に「魅力的な場所と風景を創発する新しいタイプの建築（の集合）」を提案する。

岸研究室

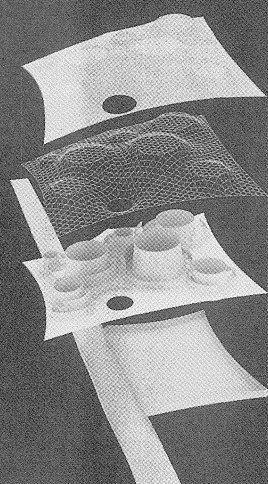
KISHI STUDIO

" 極大HOUSE "

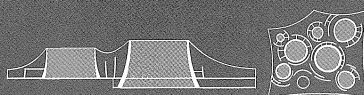
Miya SHIBANO

建築を決定する要素の一つ、「極大」と設定し、同時に想いと情緒に満ちた「home」ではなく、即物的な「HOUSE」の可能性を探る。

与件がほんの少々変化することで起ち現れる建築の姿を垣間見たい。

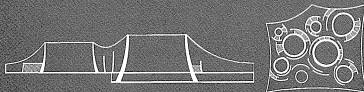


roof



属性の強い場所... 書庫、研究室など。  
情報が蓄積し、場所性が強い。

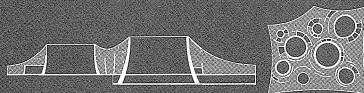
structure



属性のやや強い場所... 演習室、学習室。  
用途がある程度決まっている。

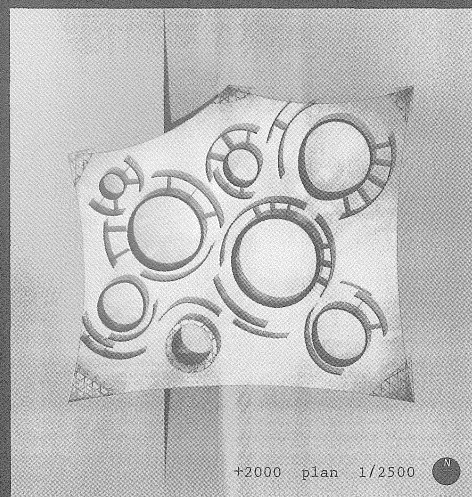
wall

basement



属性の弱い場所... 閲覧室、カフェ、ギャラリー。  
明確な境界線を持たず、ゆるやかにつながる。

promenade



+2000 plan 1/2500



あらゆるメディアが等価となる時代

本は選択肢のひとつとなる

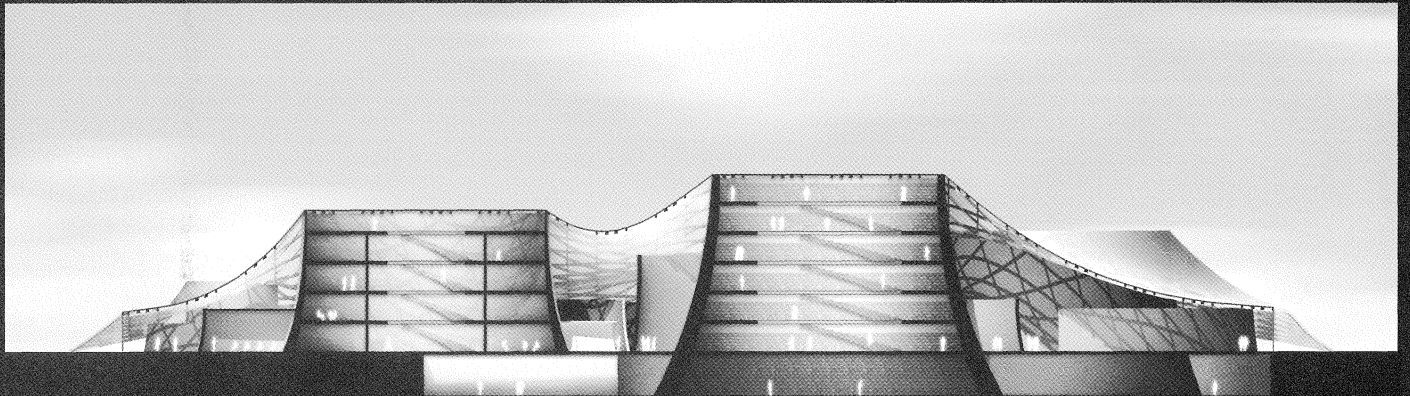
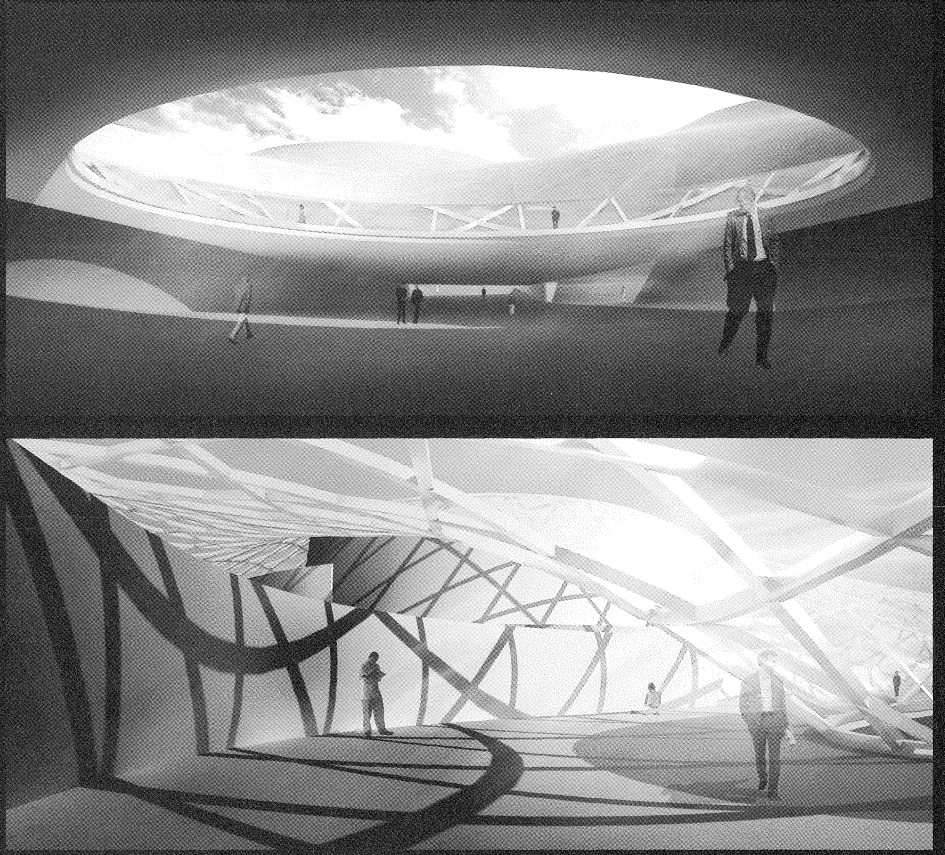
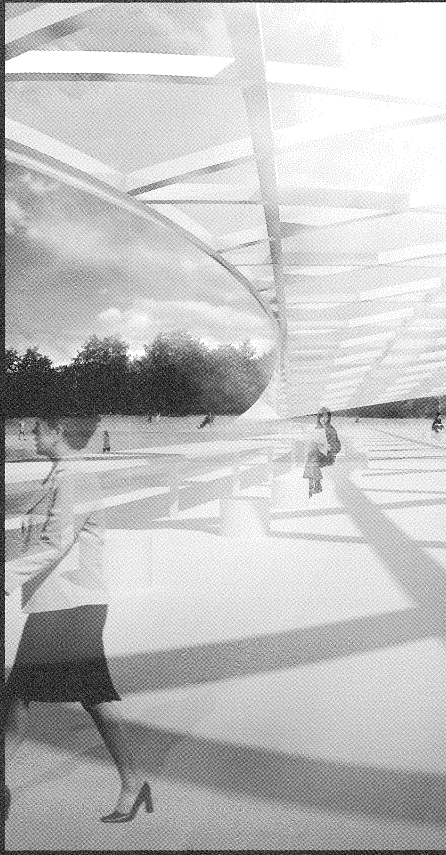
図書館になくてもならない

情報の保存庫としての機能が作り出す

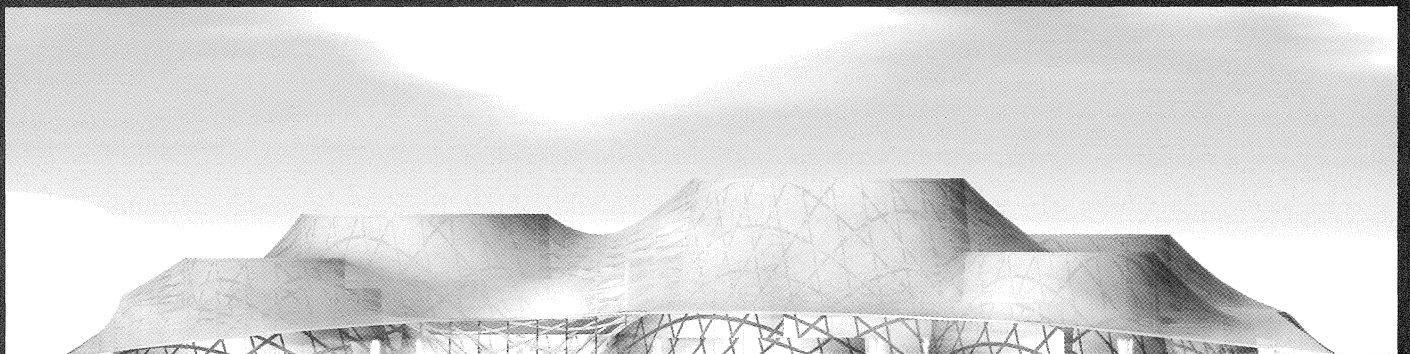
余白の空間

あらゆる機能から自由になった人々は

ほんの少しの属性を帯びながら浮遊する



A-A' section 1/750



south elevation 1/750

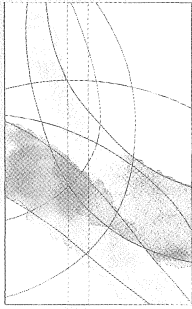
massivoid

# オトノモリ

2010年、グーテンベルク以来の革命と言われた電子書籍元年。

今後電子書籍が普及していき、確実に書物の需要が減っていく中で図書館の在り方を再考する。

書物が図書館という枠組みから離れ、大学全体に広がり人間の身体感覚に訴えかけてくる。



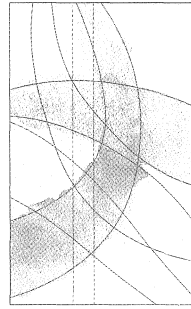
## 書物と電子書籍

将来電子書籍が普及した時を想定しこの施設では書物と電子書籍の共存を図る。

敷地を書物の帯と、電子書籍の帯が横切る。

電子書籍は図書館や大学内で知識交換の共有の為に用いられるようになる。

図書館は書物を保存していく役割を担う。

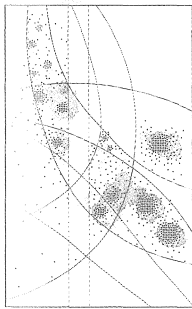


## 音に関わるアクティビティ

書物と電子書籍の帯と交差するように敷地を音のあるアクティビティの帯と音のないアクティビティの帯が横切る。

電子書籍には実体がないがそれを用いることにより大学内での人間関係が広がり会話が誘発され、音のあるアクティビティが生まれる。

それに対し、書物は黙読されることにより音のないアクティビティを生み出す。

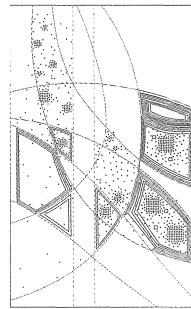


## 本の柱

書架は柱で構成されている。

本の柱は開架書架を発生源として、書物の帯を中心にグラデーション状に学校全体に広がっていく。書架はアトランダムに配置されまた書物はIC化されているのでどの棚に返してもよい。

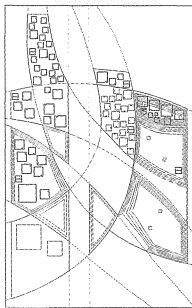
自分の好きなように棚を埋めることができ書架に個性が表れる。また書物との偶然の出会いが生まれやすくなる。



## 地形

書物と電子書籍それぞれのアクティビティの濃度が濃かったり音がこもる場合は地面から掘り下げられている。

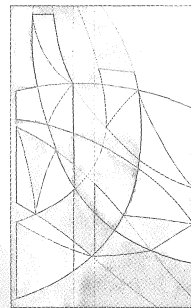
また地面から隆起した場合はこの図書館ならではのアクティビティが生まれる場として機能する。そこでは書物が読まれ電子書籍を使って議論が為され図書館がサードプレイスとなる場である。



## 機能部分

それぞれの帯が重なる領域に各々の性質を併せ持った機能を収める。

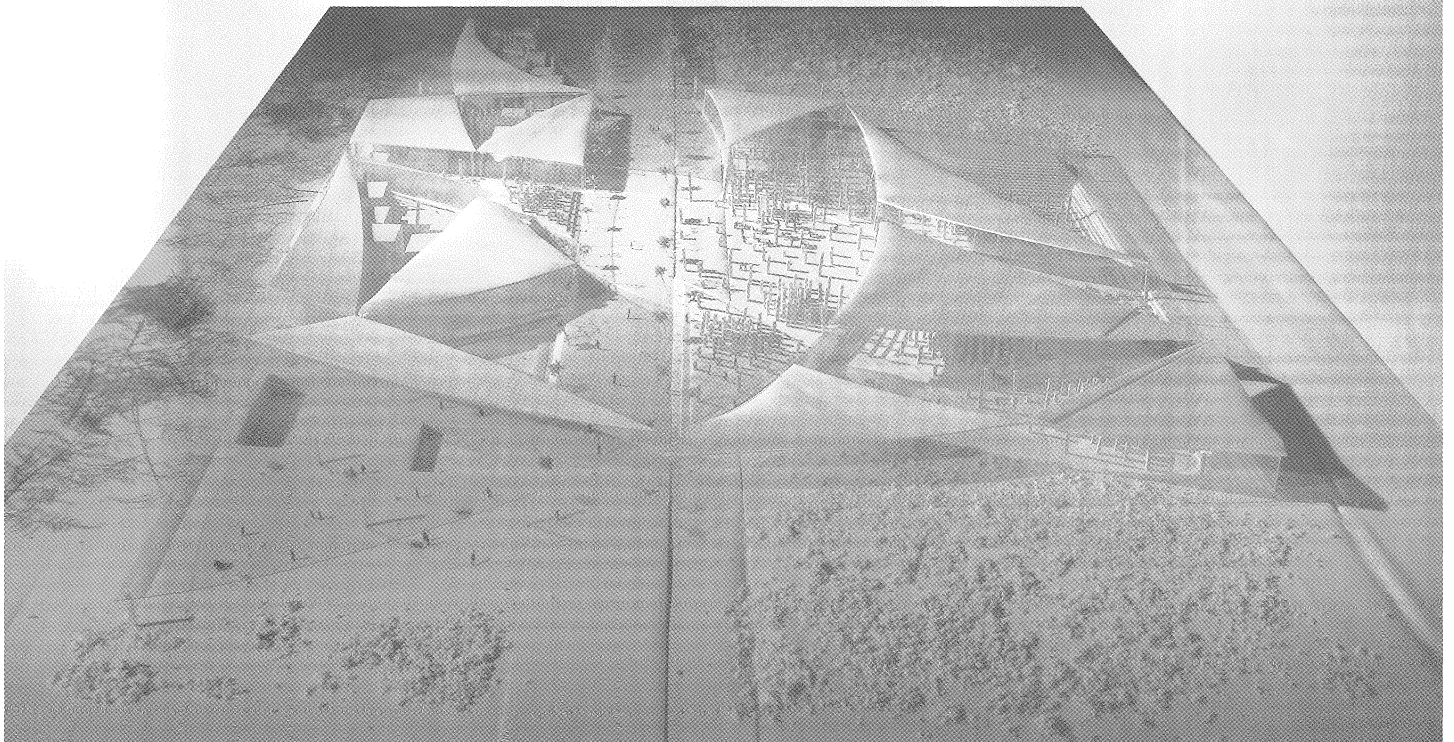
研究室や演習室、講義室が集まってできるスペースはコモンスペースとして機能する。バックヤードは丘のように隆起した地形に埋まっている。書庫は地下に設けられている。

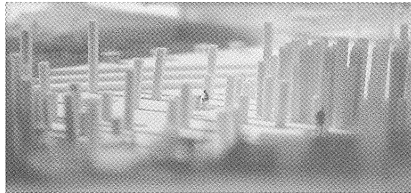


## 屋根とガラス

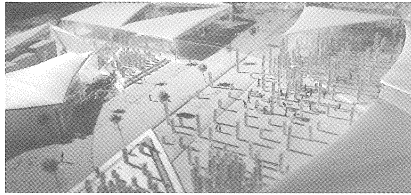
帯の境界でアクティビティが変化するところに屋内と屋外が入り混じるようにガラスと屋根が組み込まれる。

電子書籍の帯との境界面に入るガラスには映像メディアを映すなどして活用される。





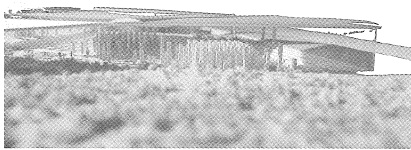
図書館内部を望む



プロムナードの両側に広がる  
パブリックな空間



南方より見て見える  
プロムナード

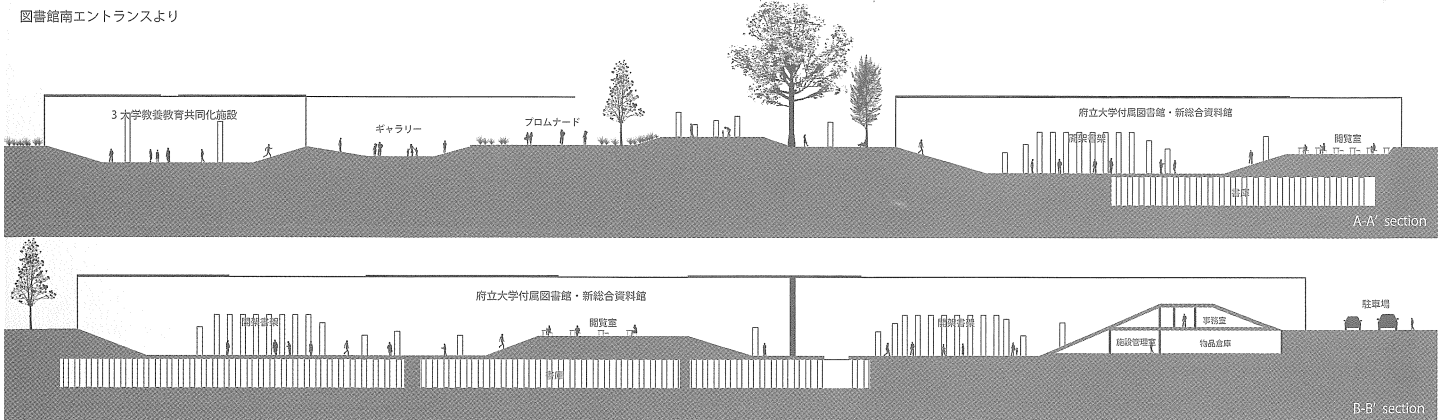


図書館南エントランスより



- |  |   |   |  |
|--|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 公開演習ホール</li> <li>2. 会議・セミナー室</li> <li>3. 情報研究・演習室</li> <li>4. 学芸室</li> <li>5. 学芸センター</li> <li>6. センター長室</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>7. 情報記録</li> <li>8. 図書室</li> <li>9. 展示スペース</li> <li>10. 展示室・演習室</li> <li>11. 資料部長室</li> <li>12. 図書部長室</li> <li>13. 事務室</li> <li>14. 施設管理室</li> <li>15. 図書管理スペース</li> <li>16. 印刷室</li> <li>17. 複写サービス室</li> <li>18. 複写・印刷部長室</li> <li>19. 読書室</li> <li>20. 読書室</li> <li>21. 林書室</li> <li>22. 読書室</li> <li>23. 高層（閉鎖スペース）</li> <li>24. 印刷管理室</li> <li>25. 物品倉庫</li> <li>26. データベース構築リポジトリ管理室</li> <li>27. 電子図書館スペース</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>28. 文学部図書スペース</li> <li>29. 文学部図書</li> <li>30. 文学部図書研究</li> <li>31. 演習室</li> <li>32. 学生学芸室・資料室</li> <li>33. AV実習室</li> <li>34. 施設学術図書・実習室</li> <li>35. 文化情報学術図書・実習室</li> <li>36. 文化情報学術図書</li> <li>37. 資料室</li> <li>38. 会議室</li> <li>39. 学芸室</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>3. 大学教養教育共同化施設</li> <li>40. 演習室</li> <li>41. 大講義室</li> <li>42. 非常対応講義室</li> <li>43. カフェ</li> <li>44. 会議室</li> <li>45. 鳥鳴</li> </ul> |
|--|---|---|--|

plan 1/1300



A-A' section

B-B' section

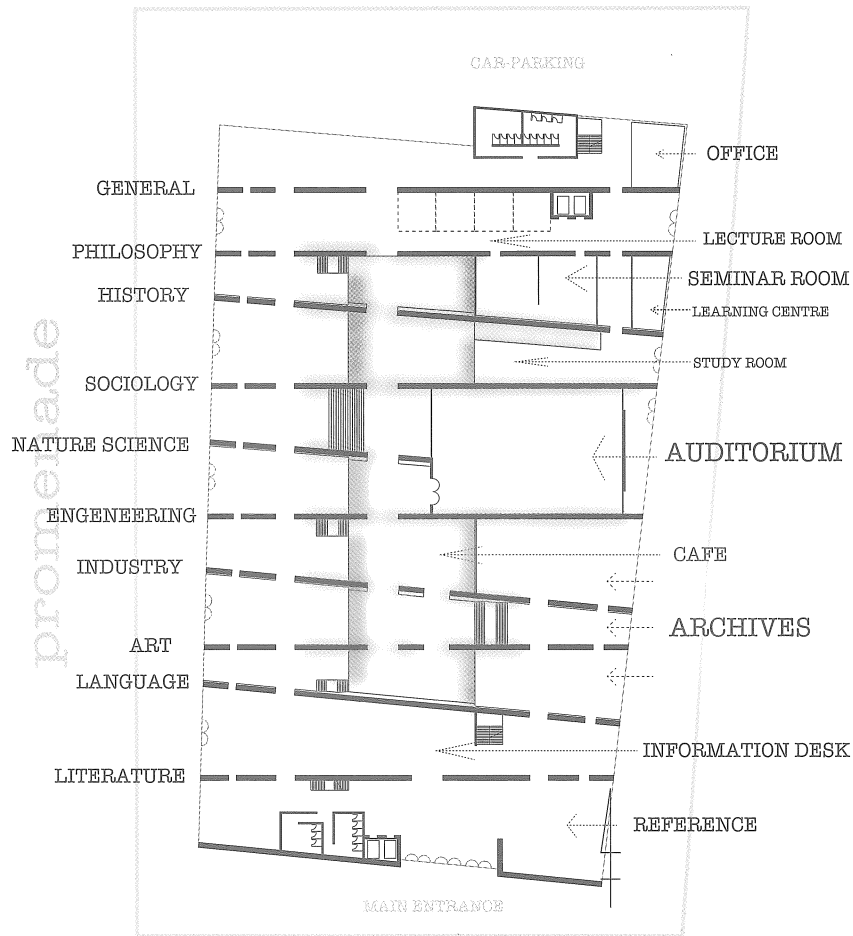
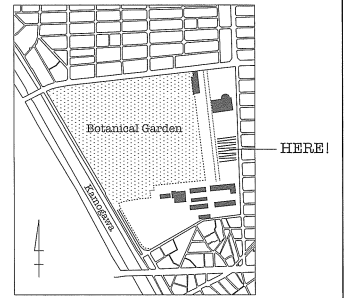
# MEDIATHEQUE MUR BLANC

めまぐるしく変化していく現代の情報メディアの形に対して、図書館という場所はこれからどのように変化していくのか。そして人の身体や五感と情報との関わり方はどのように変化していくのか。

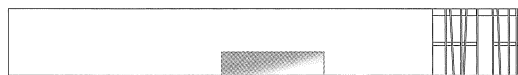
## 〈WALL AS MEDIA〉

ラスコーやアルタミラの壁画にみられるように、壁は最も原始的な情報の宿りしろの1つであったと考えることができるだろう。それと同時に、壁は人と情報が関係を結ぶ場所の空間性を決定する要素ともなる。壁を情報と人の関係性を導くパラメータとして、またメディアそのものとして捉えることで、人と情報とその宿りしろとしての空間が多様な関係を築けるような、そして書籍だけでなく様々な情報メディアの変化を受容できるような「メディアテーク」の可能性を考えた。

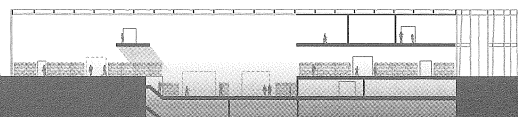
SITE MAP



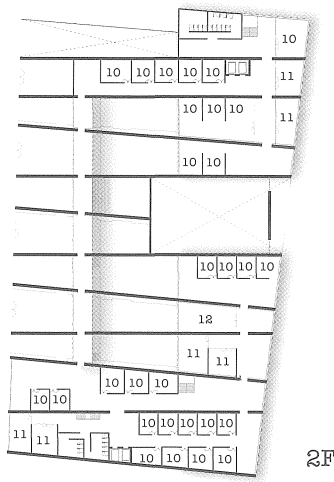
PLAN 1/250



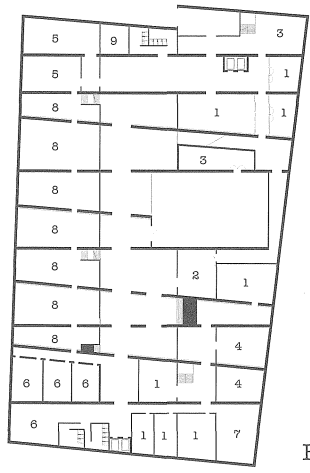
E-W elevation



E-W section



2F

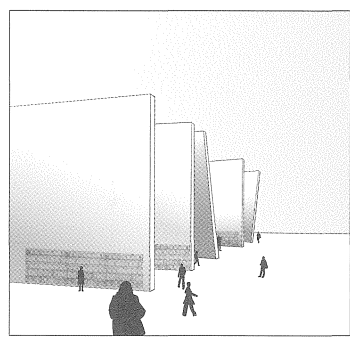


B1F

- 1. office
- 2. kitchen
- 3. storage
- 4. copy room
- 5. work space
- 6. laboratory
- 7. server room & digital library
- 8. stack room
- 9. facility management room
- 10. professor' s lab
- 11. student' s lab
- 12. meeting room

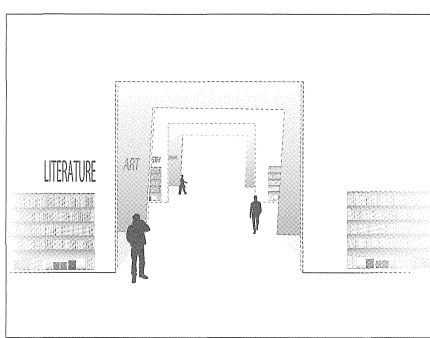
**Wall or Media itself**

白い壁は情報 (information) の宿りしろであり、メディアそのものとなる。空間と情報、その媒体 (Media) は壁というマテリアルを介して人のアクティビティへと還元される。



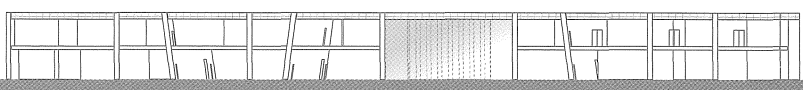
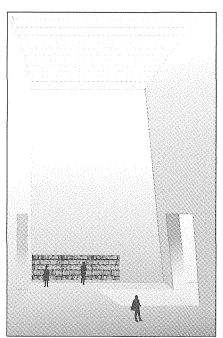
**Redundancy**

壁を抜ける度に繰り返される体験の中にわずかな、確実な相違が生まれる空間であること。

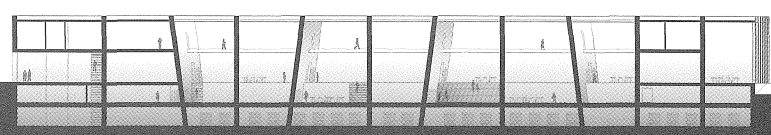


**Sequence**

壁に沿った連続する空間の中に異なるアクティビティが展開されること。



N-S elevation



N-S section



# vestige

失われた領域性  
覆い隠され、目を背けられた過去  
かつてそこにあったはずの  
空間、記憶...

人間が生きていく中で  
過去の記憶とどう向き合うか  
そのために建築には何が出来るのか

長崎の地  
原爆の記憶と向き合う式典空間



## Site

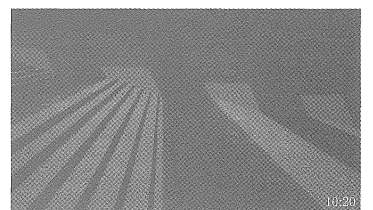
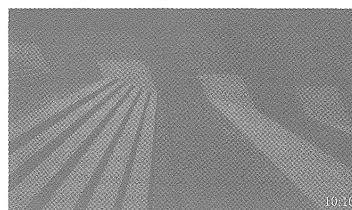
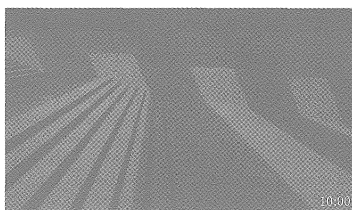
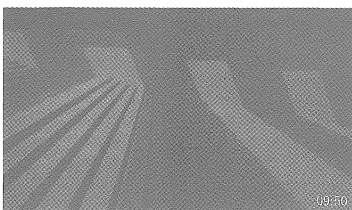
長崎県長崎市の中心部に位置する平和公園を敷地とする。  
1945年8月9日にアメリカ軍により原子爆弾が投下され、この一発の兵器により当時の長崎市の人口24万人（推定）のうち約14万9千人が死没、建物は約36%が全焼または全半壊した。平和公園は爆心地から300メートルほどの、小高い丘の上に位置する。  
毎年8月9日の「長崎原爆の日」にはここで平和祈念式典が開催される。



## Concept

原爆のあの痛ましい記憶でさえも、時の移り変わりに耐え、完全に、摩滅せずに受け継ぐことは不可能であろう。  
今を生きる人々が、毎年訪れる、たった一日だけのある一瞬を共有する「式典」という形式は、過去の出来事に対する新たな「記憶」として今を、未来を生きる人々の中で育まれるだろう。

過去の出来事の記憶に思いをはせ、現在の自らの記憶をその土地に刻み込む。

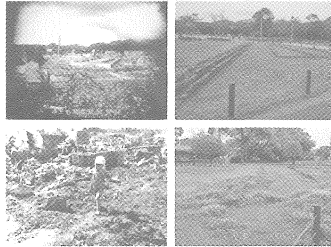




A-A' Section 1/350

## Context

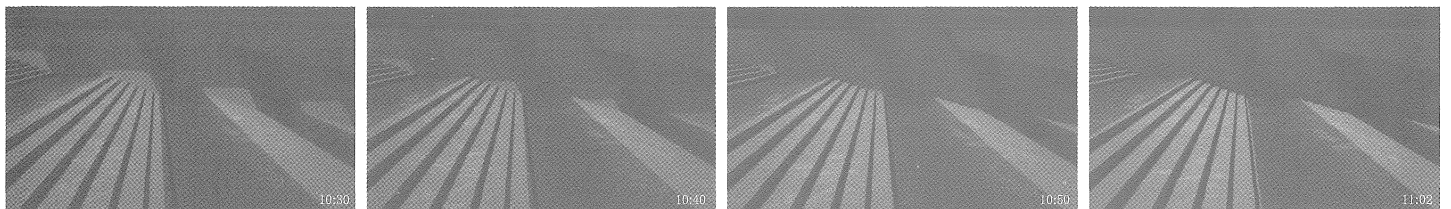
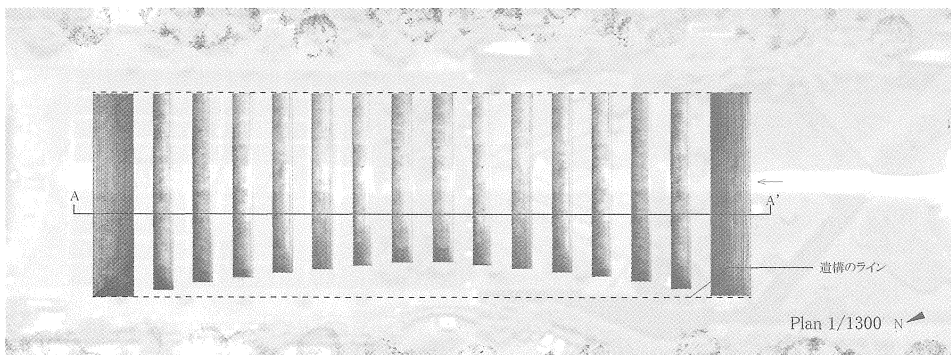
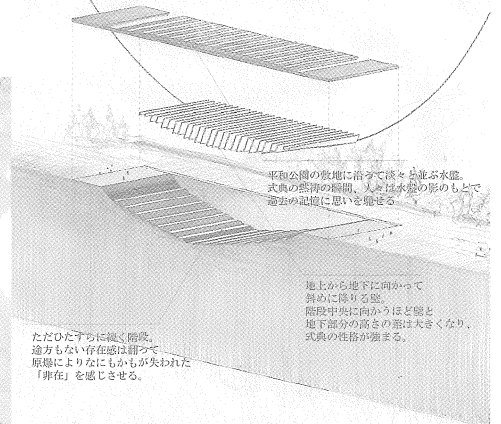
かつてここは長崎刑務所浦上支所の敷地であった。爆心地から300メートルほどしか離れていなかったこの地では、原爆の光の炸裂と熱線により、受刑者、職員等134名が犠牲となり、刑務所は一瞬にしてがれきの山と化した。戦後この地には平和公園が作られ、かつて存在した刑務所は忘れ去られようとしていた。しかし、1992年に平和公園の地下に駐車場を建設するための工事で、地中からかつての刑務所の基礎部分が発見される。爆心地からかなり近い地点であったことから、この遺構を原爆の記憶として後世に伝えようと遺構の保存を求める運動が始まる。しかし、もとの場所が刑務所ということもあり、積極的な保存を求める声は弱く最終的に現在の平和公園内に遺構の基礎部分をもとの刑務所の領域とは関係なく断片的に残されている状況である。



## Diagram

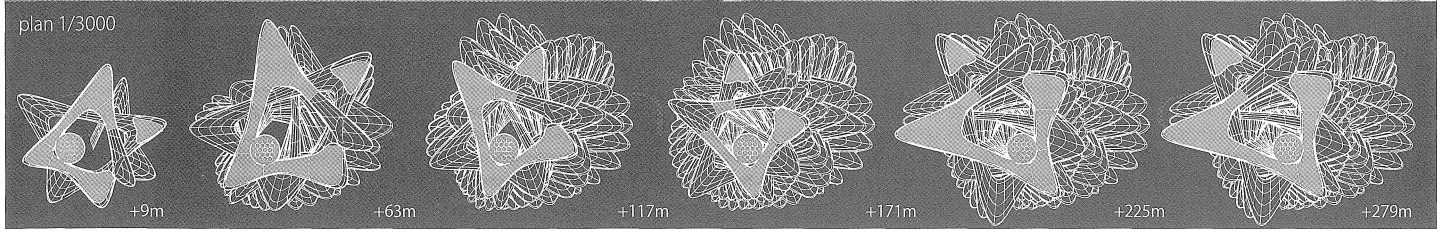
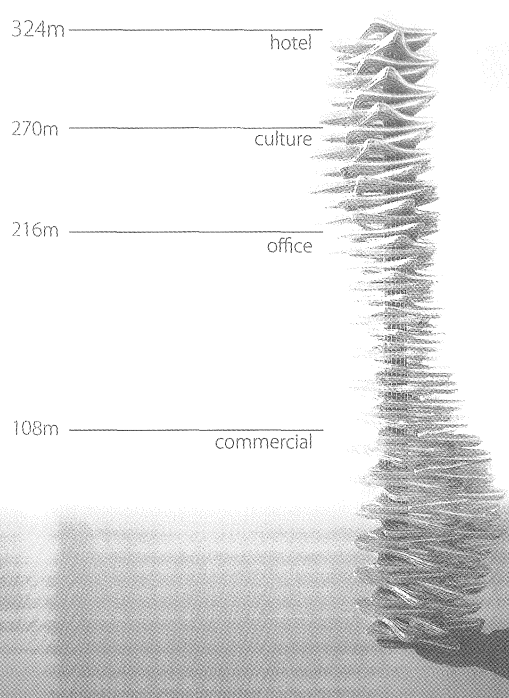
長崎原爆の日である8月9日の原爆投下時刻11:02の太陽高度である64度に傾けられた壁と、地上面の水盤により、この時刻には地下空間の階段部分に水盤の影が落ちる。式典時人々はこの影の下で祈りを捧げる。

地上の水盤のそろうラインと地下空間に落ちる水盤の影のラインはかつてここに存在していた刑務所の遺構のラインを表し、式典時のみ、失われた遺構の領域性が補完される。

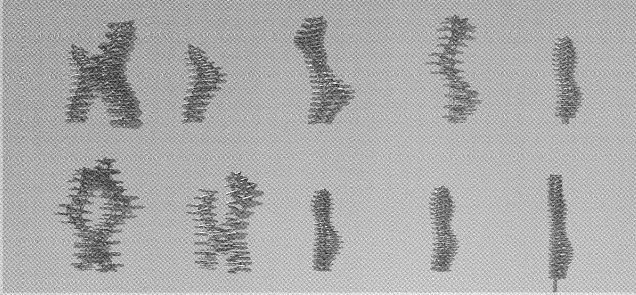


architecture-kinetics

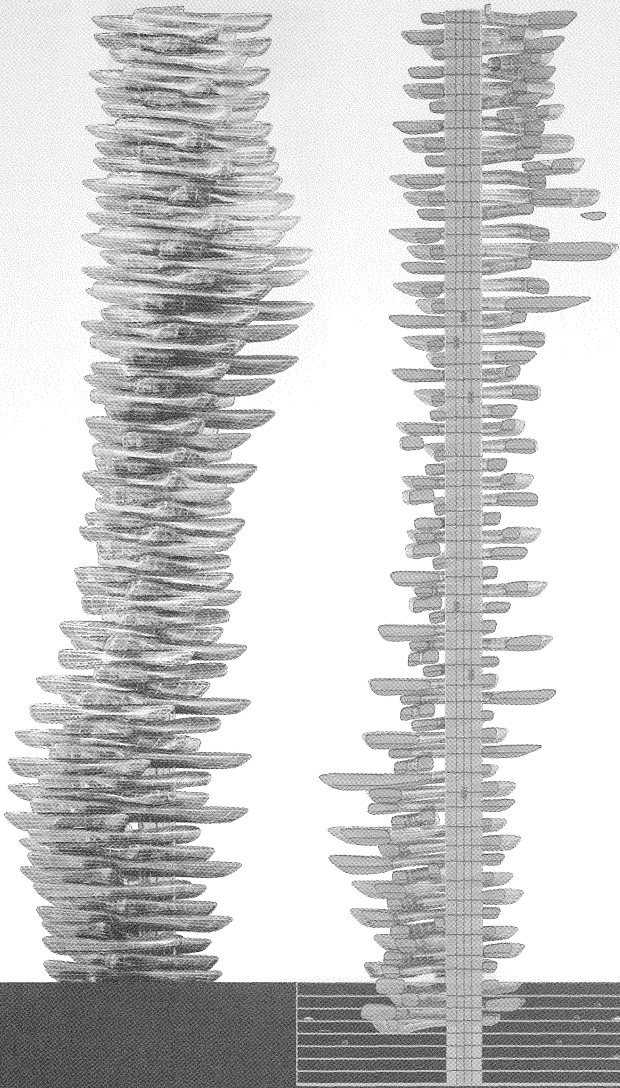
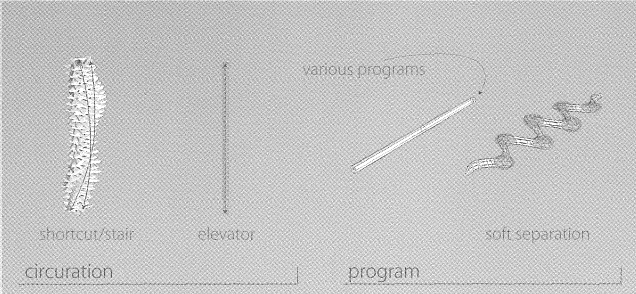
建築は、固定された形態と向きを不可避の材料を力や  
 重力によって動かすか、北極へ垂直され、北極へ垂直の形態を帯びる。  
 固定された建築は、不動の建築を招き、移動する。



-form study-



-diagram-



south elevation

A-A' section



arkinetics

## 生きるための建築

人の想像力を  
斯きたてる  
無為の空間

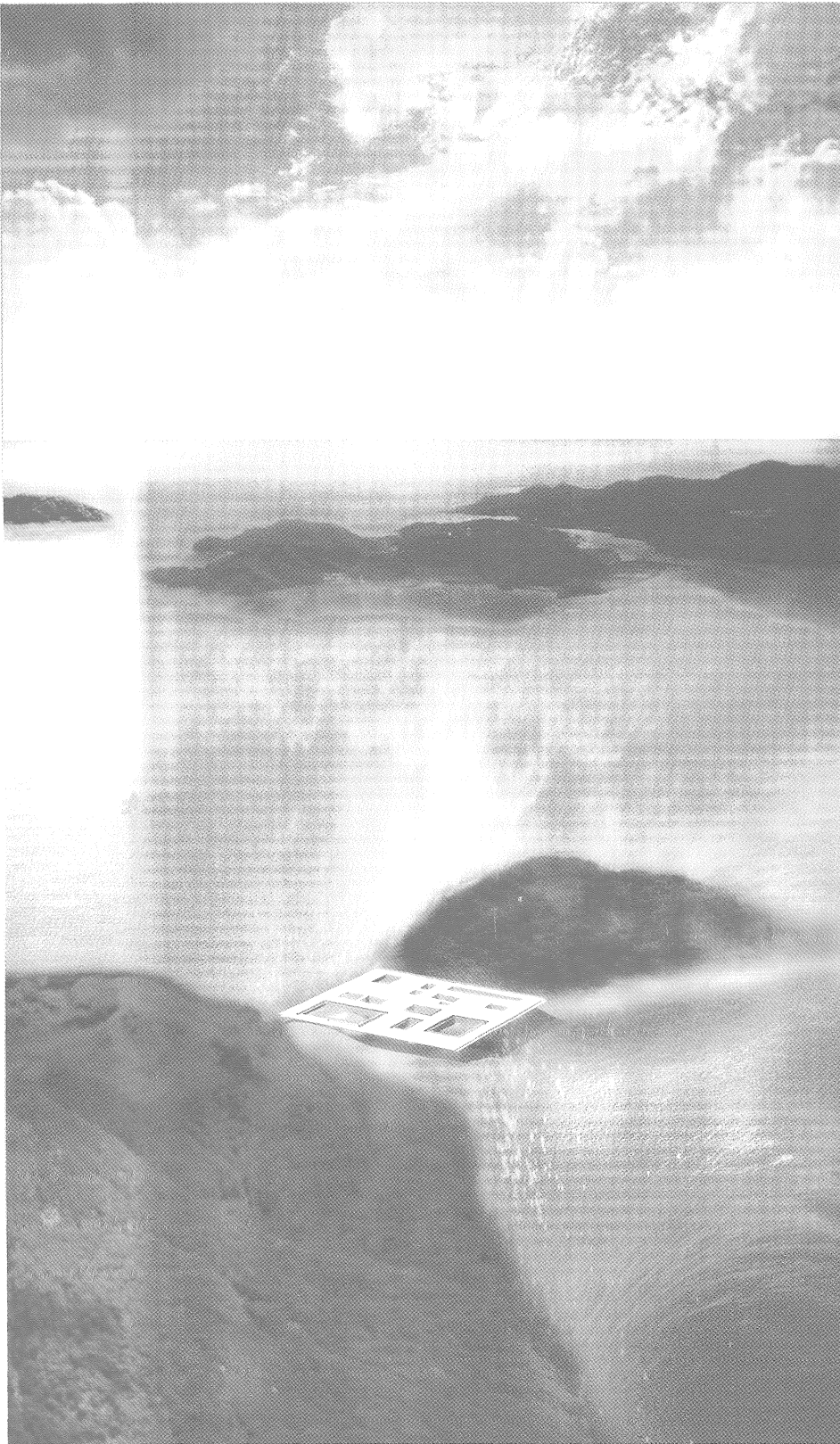
人の意識をダイナミックに  
作用させ新たな意味を生む

雄弁でありかつ  
沈黙であるような

不自由でありかつ  
自由であるような

過去を描きながら  
明日を描くように

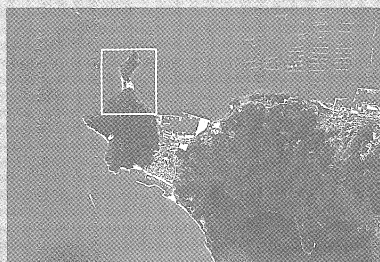
詩としての建築を  
構想する



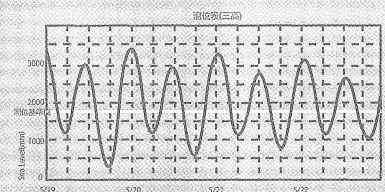
「意味の生成」を掘えながら  
具体的に建築を思考するにあたり  
一人の作曲家をモデルに  
彼のための建築を構想した。

作曲家の作品・著作を手描かりに特徴的な  
要素を抽出しその言葉をもとに空間を構成した。

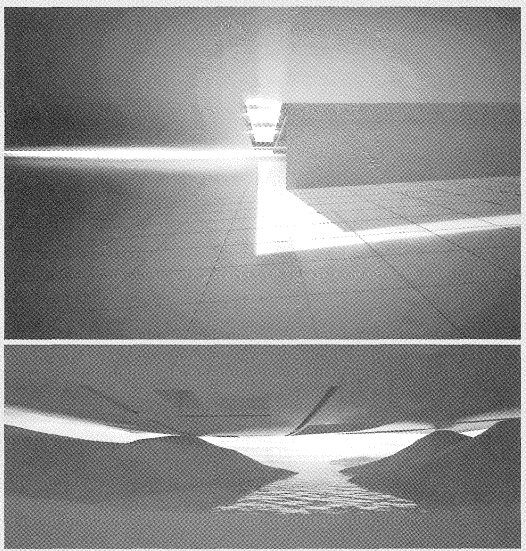
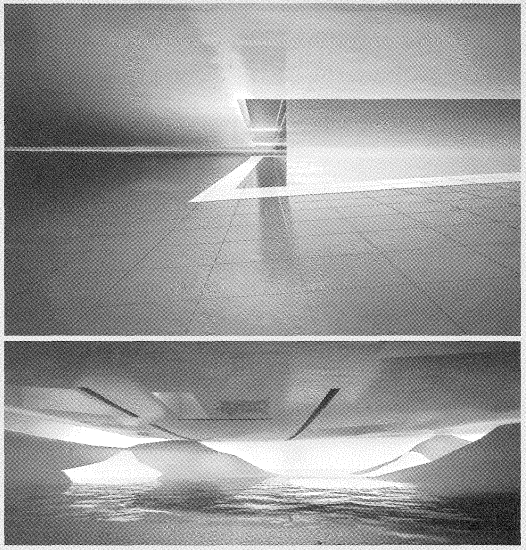
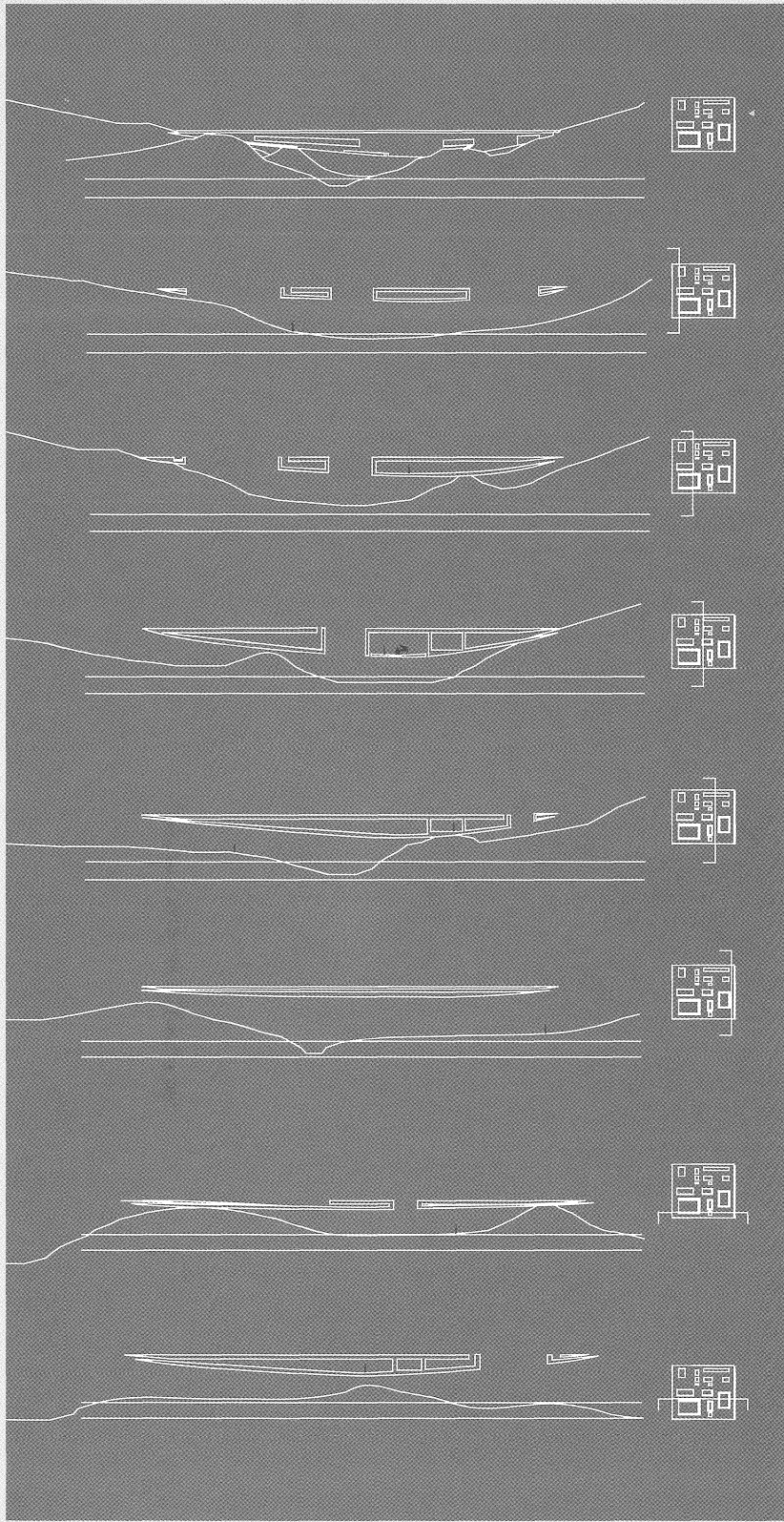
敷地の豊かな自然環境、  
時々刻々と変容する環境と  
それを記録する座標としての建築。



敷地は作家の出身の島である、広島県能美島。



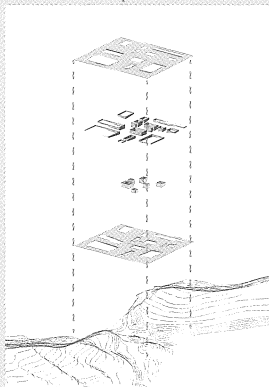
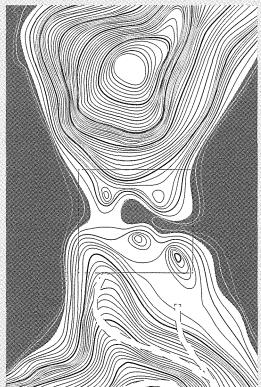
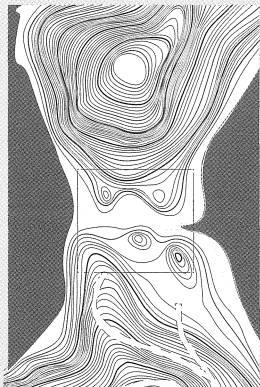
瀬戸内海の海は穏やかであるが潮の満ち引きが激しい。  
能美島も正確には江田島の一部であるが、一つの島でありながら、  
江田島、能美島という名称が残っており、昔は2つの島であった。



大潮 干潮時 Ground Plan

満潮時 Ground Plan

Composition



**Upper roof**

Upper roof と Under roof から構成される。外周部に設けられたスリットから内部を光で満たす。

**Void**

地表に光を供給しながら Upper roof と Under roof をつなぐ壁として機能する。

**Utility**

居住機能を支える最小限の要素が配置されている。

**Under roof**

屋根裏のようだが、わずかな隙間を内包するよりに外周部からすばむように生成される。中央部に穿たれたスリットは内部空間に間接光を帯びている。

**The earth**

周辺の斜面と勾配を呼応させながら、ただ支えるためだけに隆起した地表。地表と Roof の関係により断片的に多様な空間が生成する。

**Perspectives**

Summer, 12:00  
tide level  
=+3000m from sea level

Winter, 6:30  
tide level  
=+2000m from sea level

Central Room  
Summer, 12:00  
tide level  
=+3000m from sea level



## SITE

京都 磁土

阿駱公園の南東に位置し、琵琶湖の水が京都市中心地へと流れ込む、水の玄関口である

Kyoto

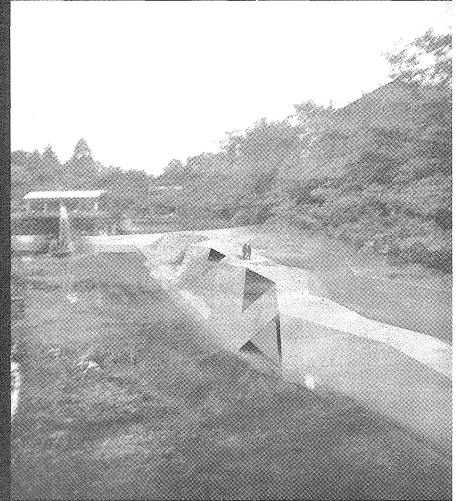
Lake Biwa

ここには琵琶湖の水によって生み出された遺産・施設が点在し、京都と京都市の基盤を作り上げた痕跡であるとともに、今尚京都を支えている場所である。

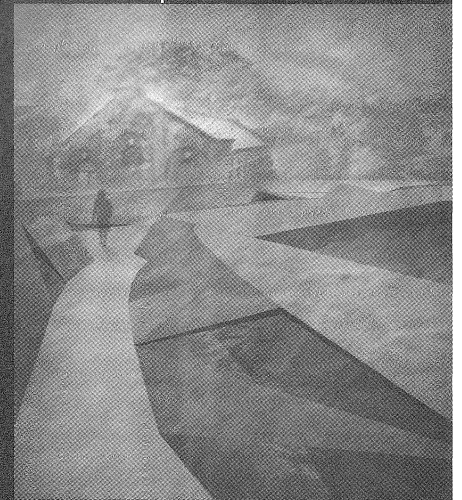
Lake Biwa Canal



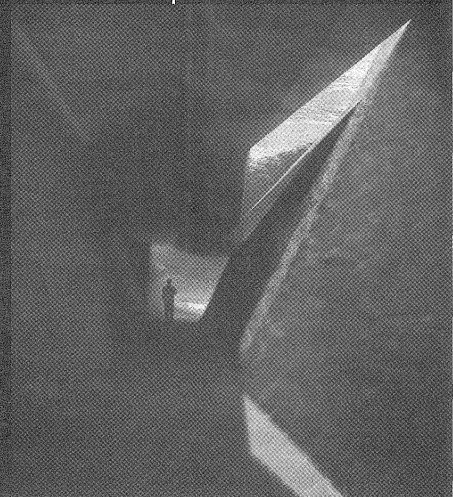
## A. EMBANKMENT part



## B. BRIDGE part



## C. TUNNEL part



# HISTORY

# PROBLEM

# PROPOSAL

琵琶湖の水を引くことは、京都にとって夢であった。

明治の東京遷都に伴って衰退した京都に活力を呼び戻すべく、1885年(明治18年)、京都府はこの夢の事業に着手したのである。

貯水、発電、水道  
 貯水により様々な都市機能が作られ、これらは京都を近代都市に押し上げる大きな役割を担った。

琵琶湖疎水は明治から現在に至るまで、京都に命の水をもたらしている遺産であり、そして人と水がうまく付き合ってきた重要な歴史と言える。

こうした重要性にも関わらず、側溝と側溝の遺構は、大きな道路によって分割・断片化され、その中心的な存在である日本の水も都市から遠いこうした現状を築き、さらなる都市の遺産を消す。未来へ記す建築を構想する。

散在る遺構が繋げられ、その重要性を都市に誇りかける。より人に近い環境になることを目指す。

それは、人の空を支えるエネルギーや、乾きを潤す潤いを作り上げるにまつた歴史に独れる機会を創出し、人と自然が共存することの意味を根拠的に問い直す場となるはずである。

インクライン、発電所、浄水場などの産業遺産に対する視察場を提供し、琵琶湖疎水に関する展示を行う。

と同時に、岡崎に唯一欠けている近代岩衛の風景空間となり、新旧の文化の重なり合いを顕著し、ひいては未来への創造を促す場となる。

既存の堤防の延長として振る舞う 人々を水辺まで引き込み、都市と水の距離を縮める

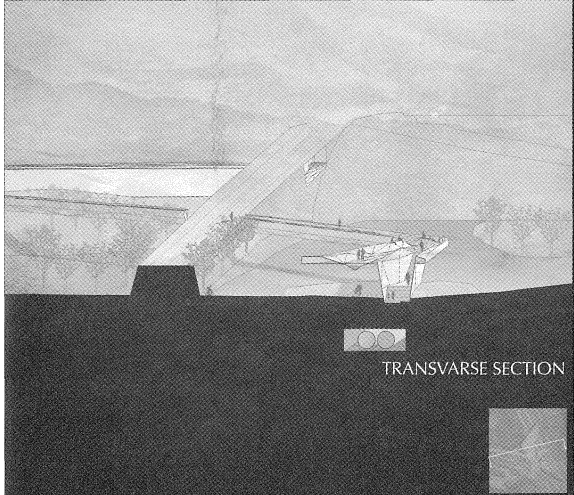


TRANSVERSE SECTION



LONGITUDINAL SECTION

現在地下に潜っている水力発電の水圧鉄管の上を巡りながら、旧発電所とインクラインを物理的に接続し、二つの遺産の関連性を浮き上がらせる

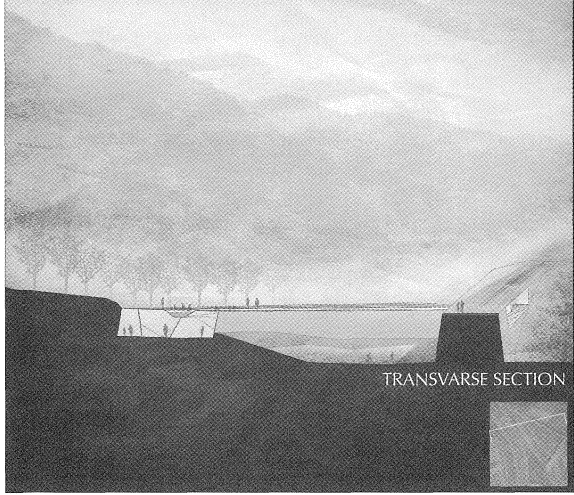


TRANSVERSE SECTION

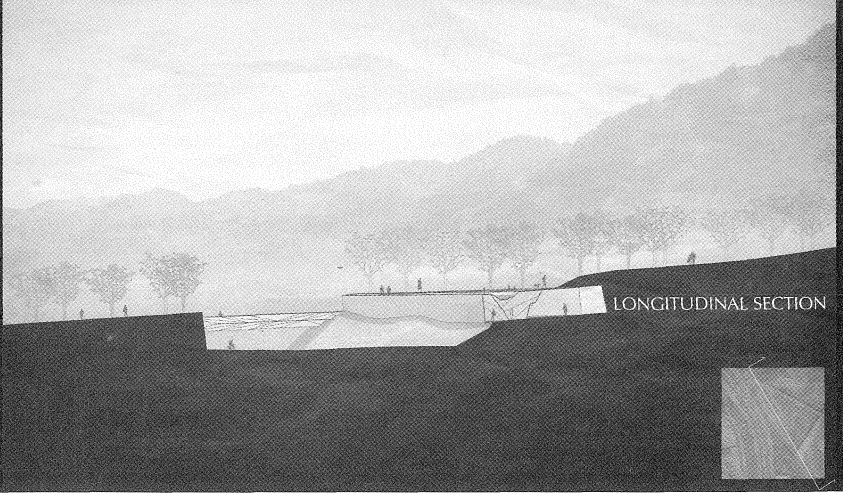


LONGITUDINAL SECTION

疏水工事の工程として、また既存の煉瓦のトンネルなど、疏水と関連の強い“隧道”の空間を現出させ、インクラインと浄水場を視覚的に接続する

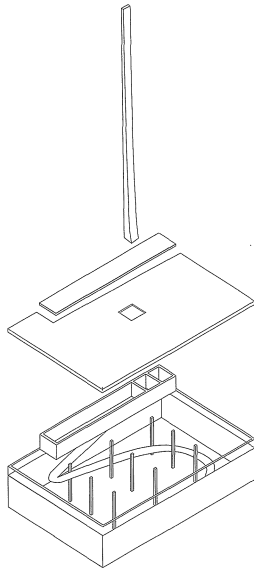


TRANSVERSE SECTION



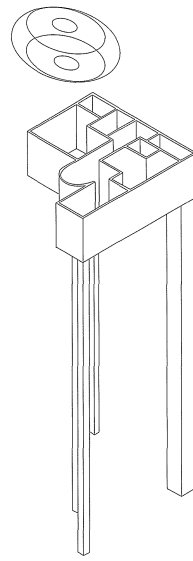
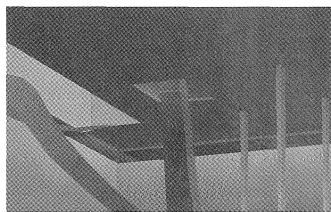
LONGITUDINAL SECTION





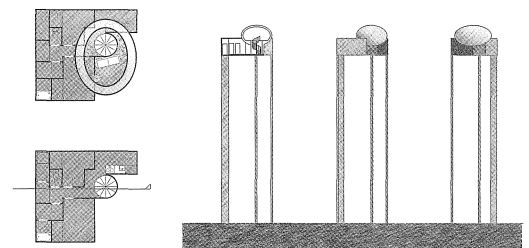
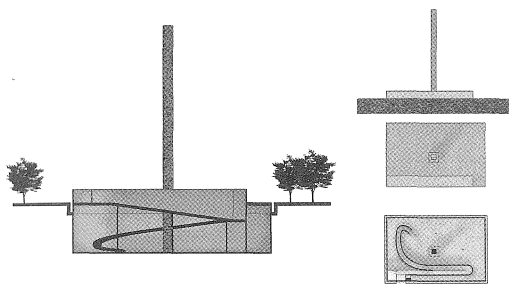
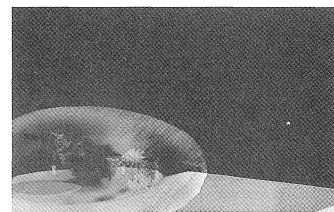
キッチン

「私がこの世で一番好きなのは台所だと思う。」「ふと目を上げると窓の外にはさびしく星が光る。」「田辺家に拾われる前は、毎日台所で眠っていた。どこにいてもなんだか寝苦しいので、部屋からどんどん楽なほうへ流れていったら、冷蔵庫のわきがいちばんよく眠れることに、ある夜明け気づいた。」「冷蔵庫のブーンという音が孤独を守った。」「ただ星の下で眠りたかった。朝の光で目覚めたかった。」「一人で住むにはその部屋は広すぎて、」「テレビのある和室から祖母が出てきて、お帰りと言う。」



ソファの家

「そのマンションは、家から中央公園を挟んだちょうどほんたい側にあった。」「その高くそびえるマンションを見上げたら彼の部屋がある十階はとても高く、きつと夜景がきれいに見えるんだらうなとは思った。」「そこは、実に奇妙な部屋だった。台所に続く居間にどかんとある巨大なソファが目に入った。」「その広い台所の食器棚を背にして、テーブルを置くでもなく、じゅうたんを敷くでもなくそれはそこにあった。」「雨に覆われた夜景が間ににじんでゆく大きなガラス、に映る自分と目が合う。」「そのオープンな生活場所に眠るのに慣れなかったけど、すぐなじんだ。」「懐かしさで苦しいソファ」



言葉からimageされる空間の創出—小説の空間化

「閉鎖的な空間」と言われて、我々はどうのようなimageを思い浮かべるであろうか。

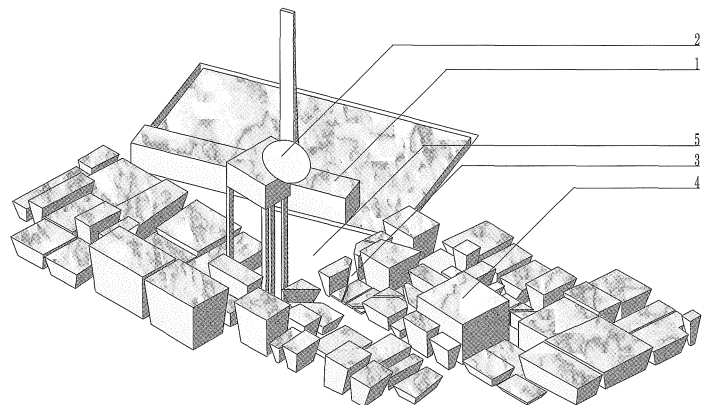
ある人にとっては窓のない小部屋かもしれない、ある人にとっては見渡す限り広がる砂漠の真ん中かもしれない。どれくらいの高さで、どれくらいの面積なのか。幅はどれくらいで、形は丸なのか、それとも四角なのか？動線は何回曲がる？色や素材、明るさは？...

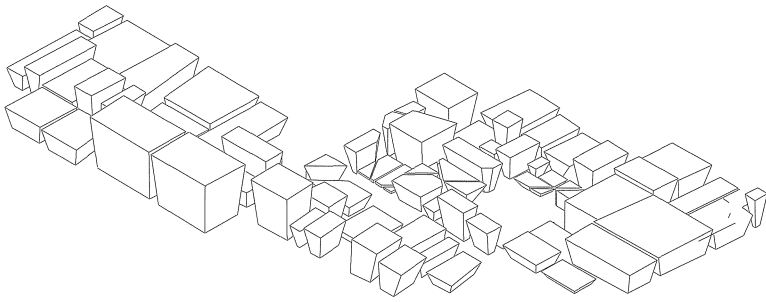
同じ言葉からimageされる空間でも、それは人や状況により様々だ。その場にあった言葉にぴったりの空間は、その何十通りものimageから選び取られる。

書院造や茶室に建築家の名前が語られることはない。一方ルネサンス以降建築はその設計者である建築家の名前と共に語られるようになった。これはどういうことだろうか。たとえばサン・ピエトロ大聖堂。この建築が場所も時代も越えて多くの人に知られているのは、その幾何学的な廊下と壮大なドームから構成される空間が、「教会」という空間が、ミケランジェロというフィルターを通して多くの人から共感を得るimageとして具現化されているということなのか。

個人によるimageの個性性、すなわち空間にまつわる解釈の自由が認められた時代に言葉からより豊かな空間を創出することを試みる。

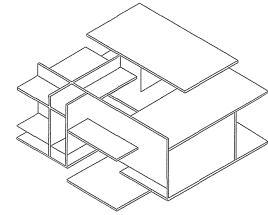
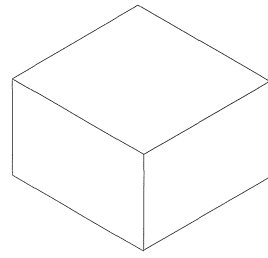
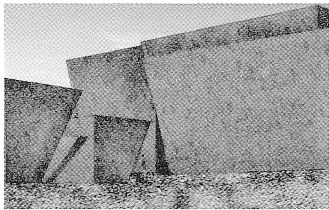
実際に小説を世に、そこからimageされる空間をつくってみる。  
吉本ばなな「キッチン」を読んでみた。





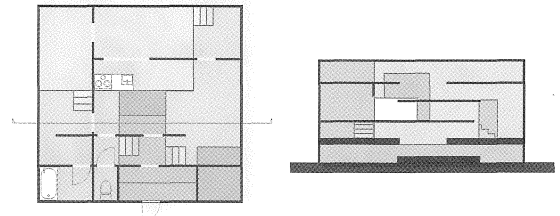
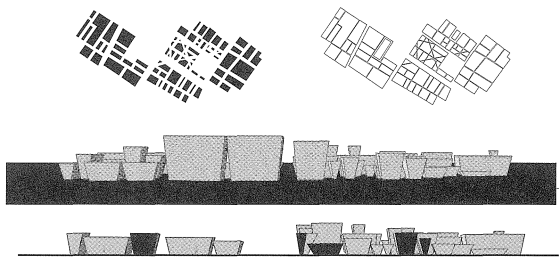
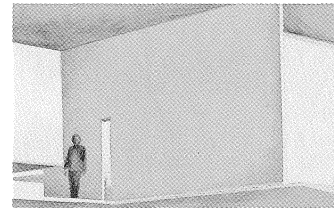
### 暗い路地裏

「行くバスの後姿を見送って、私は暗い路地に駆け込んだ。暗がりがかがんで、もうわんわん泣いた。ふと気が付くと、明るい麻呂の上に白い蒸気が出ているのが浮かんで見えた。一瞬房だ。私はどうしようもなく、暗く、明るい気持ちになってしまっ、頭を抱えて少し笑った。」「道も足元も、静まり返った街並みも少し明るく見えた。いつも普通に目に入ってくる電柱や、街灯や、停めてある車が、黒い空が、うまく見えなかった。すべてが上記の向こうにあるようにシールドに至んで美しくゆがんで光り、目の前にぐんと迫ってくる。」



### アパート

「旅行用の小さな歯ブラシセットと、フェイスタオルを探し出すのに何分を要しただろう。私は文庫減装だった。引き出しを開けたり、閉めたり、トイレのドアを開けてみたり、花瓶を倒して床を拭いたり、結局何も手に持ってなかったときは少し笑って、落ち着かなくちゃと目を閉じた。歯ブラシとタオルをバッグに入れて、ガスと留守番電話を何度も確かめて、ふらふらとアパートを出た。」



#### 「キッチン」に登場する5つの印象的な場所

- 1、キッチン 祖母と暮らした一軒家
- 2、ソファの家 田辺親子のマンション
- 3、暗い路地裏 街の描写
- 4、アパート 主人公の一人暮らしのアパート
- 5、緑の空間 中央公園

